

《研究ノート》

20世紀初頭の合衆国北西部における日本人労働運動

黒川 勝利

19世紀末から20世紀初頭にかけてのカリフォルニア州では「職工義勇会」, 「日本人靴工同盟会」, 「フレズノ労働同盟会」などいくつかの日本人労働団体が結成され, 本国の労働運動にも大きな影響を及ぼした。また1903年のオックスナード・ストライキにおいて, 日本人労働者とメキシコ人労働者が人種を越えて共闘したという輝かしい記録が残されている。そしてこれらの組織と運動については, ユージ・イチオカをはじめとする研究者たちによってかなりの程度まで実態が明らかにされている⁽¹⁾。

それでは, 同じく太平洋沿岸における日本人移民の集積地であったシアトルを中心とする合衆国北西部においてはどうかであろうか。

ここでも第1次世界大戦の前後になると, かなりのことが明らかになってくる。いくつかの業種で組合が組織され, もっともそれは我々の現在の感覚では労働組合というよりも同業組合に近いのであるが, 同業, 同職種の白人組合との間に友好関係が結ばれる。そしてそれらを通じて, 中央労働評議会を要とする当時のシアトル労働運動とも関係ができてくる。理髪師組合, ダイウォーク組合などがそれである。1919年のゼネラル・ストライキ以降になると, より積極的に日本人を組織しようとする労働組合も出現する。北米食肉加工屠殺労働者組合, 通称ブッチャーズ・ユニオンの第81支部などがそれである⁽²⁾。19世紀末以降多くの日本人が働いていた鉄道業においても, 1919年5月には, 熊本県出身の山根良章がワシントン州のローズベルトで日本人を主体とした保線工友愛会第1763支部を結成している⁽³⁾。

しかしながら, 20世紀初頭までさかのぼると, 残されている記録はかなり断片的なものとなる。「日本人労働組合」という組織が1906年に結成され, 20世紀初頭から1920年代にかけて存在していたことはかなり知られている。しかしながらその歴史をきちんと整理したものは存在しないようである。またそれ以外の単発的な争議や行動などは, たとえ存在したとしてもほとんど忘れ去られているように思われる。そこで本稿では, まず第1部で, いくつかの論文, 資料の中に残されてる「日本人労働組合」に関する記述を整理し, その活動状況の一端を明らかにする。入手しえた記述は残念ながら僅かであり, 動向をきちんと解明, あるいは追求するというにはほど遠いが, 今となってはそれがはたして可能かどうかとも疑問である。

第2部では, シアトル・タイムズの1900年から1909年にかけての日本人に関する記事の中から, シアトル周辺の日本人の労働運動に関する記事を抽出, 紹介する。この時期については, 参照しうるほどのシアトル邦字新聞を入手することが困難だからである。残念ながらここでもごく僅かの例しか発

見できなかった。実際にそのような例が少なかったのか、それともタイムズの記者が少数の日本人の単発的な労働運動などにあまり関心を持たなかったゆえなのかは定かではない⁽⁴⁾。

第1部

シアトルを本拠とした「日本人労働組合」に関する文章の中でもっとも良く知られているのは、おそらくカール・ヨネダの『在米日本人労働者の歴史』の中の記述であろう。ヨネダは、1906年に「シアトルに日本人労働組合を創立し、鉄道、ソーミル（製材所）就労者の団結運動に着手」という、サンフランシスコの邦字紙『新世界』の主筆阿部豊治（照洋）の1935年の回想的随筆を紹介するとともに、次のように述べている。

この組合は会員も600名にのぼり、高橋、山田ら鉄道請負ボスの酷使を攻撃したが、機関紙はボスの圧迫でシアトルでは印刷できないので、ポートランドで発行した。この組合は労働運動の経験にとぼしかったためと、排日運動におされたために成長しえなかった。ただし、1915年12月19日付『新世界』紙シアトル通信によると、同日本人労働組合の会長高橋徹夫は、ワシントン州ラベンデル炭鉱爆発で惨死した抗夫の遺族に、同組合から醸金した25ドル81セントを送ったが、『シアトル・ユニオン・レコード』紙主筆オードより「厚意を謝す」という礼状をうけとっている⁽⁵⁾。

この記述には2つの問題がある。まずシアトルの鉄道ボスに山田という人物は存在しない。シアトル日本人史に詳しい人なら容易に想像しうるように山田は山岡（音高）の誤記である。このことはヨネダが上記の文章を書くにあたって参照したと思われるUCLA所蔵のカール・ヨネダ文書中の『新聞従業員組合時報』第1号所載の下記のような記事から確認しうる。

いまは新世界と中央日報の両新聞社長で納まつてゐる阿部豊治氏が在米同胞間に於ける労働組合運動の先駆者だつたとは、あまり世間に知られてゐない話だ。一九〇七年頃シヤトル地方で高橋、山岡などと云ふ鉄道人夫請負業者が邦人労働者を、酷使搾取してゐたのに、憤慨した阿部氏等は労働組合を組織し組合員約六百名を獲得して悪ボスと闘ひ、労働者の利益を擁護したものだ。機関紙『同胞』はボス連の圧迫でシヤトルで印刷出来ず、密かにポートランドで印刷したこともあつたそう⁽⁶⁾。

今ひとつは、前段で「山田」とともに組合によって攻撃され、組合を圧迫して機関誌のシアトルでの印刷を妨害したという「鉄道請負ボス」の「高橋」が後半の「同日本人労働組合の会長高橋徹夫」と同一人物である、という問題である。これもシアトル日本人史に詳しい者には疑問の余地がない。ヨネダは「同」という言葉を使っているけれども、1906年の「日本人労働組合」と1915年の「日本人労働組合」とは実際に同一の組織なのであろうか。

しかしながら、ここではこの問題はさしおいて、この組合の設立後まもない時点での活動を示すと思われる竹内幸次郎著『米国西北部日本移民史』の中の一節に注目したい。竹内はこの書の第3篇第

5章において西北部各地における排日運動を列挙しているが、その一つとして「ベーリングハム事件」を取り上げ次のように述べている。

エヴレット事件後同地方は久しく太平打続き、日白間の反目も起らなかったが、一九〇六年八月（此年より一九〇九年に亘り大恐慌不景気襲来しシヤトルより首府ワシントンまで乞食に等しき失業者の行列が出来たことがあつた）労働組合に属する白人労働者数千名、英領バンクバーに暴動を起し、日支人排斥の擧に出でた。其巨魁たる華州出身のフォーラーは更に銚を転じて南下し、ベーリングハムを襲つたから同地同胞の状態は極めて危殆に陥つた。故にエヴレット事件の際、日白人間を調停した俠勇佐藤信三郎氏は直に同地に赴き同胞を指揮し、先づシヤトルなる同胞労働組合に念を報じ、自ら諸方に奔走して白人當局を説き、又イーグル・ホールにおけるフォーラー等排日派の演説会に臨み、シヤトル同胞労働組合側とフォーラーとの立會演説を試み、大に排日派の膽を奪ふて其機銚を挫き、巧みに惨禍を避くることを得た。而して彼フォーラーは斯る不結果に終れる為、遂に発狂し、白人労働組合の氣勢亦鎮静し、爾来西北部における個人直接行動的の排日行為は漸次衰微するに至つた¹⁷⁾。

バンクバー暴動の直後のことであるからこの文章中の「一九〇六年」というのは「一九〇七年」の誤りであるが、佐藤信三郎から連絡を受けてベーリングハムに赴き、フォーラー一派との立會演説に臨んで排日運動の沈静化に成功した「シヤトルなる同胞労働組合」とは、阿部が設立したとされる日本人労働組合であったと考えてもまず間違いはないであろう。そして実のところ、おそらくこれに関連するのではないと思われる事実を、我々は白人側の史料に見いだすことができる。1907年9月の『ベーリングハム・ジャーナル』*Bellingham Journal* には次のような記事が掲載されているのである。

シアトル日本人労働団体の事務長であると主張する K. ササキが、シアトルの日本人出版物の編集者であるジヘイ・ハシグチに伴われて、日本人に対する現在の感情を調べるためにやって来て、水曜日および木曜日当市に滞在した。彼等は木曜日夕方の評議会に出席し同国人のためにかなりの時間話をした。

通訳を通じてササキ氏は、日本人はほとんどすべての沿岸都市で組合を作りつつあり、その影響力を全合衆国に広げることが目的であると語った。組織の目的は労働組合と密接な関係を樹立すること、日本人の賃金水準を上げること、そして日本人契約労働者の輸入を防ぐことである。彼等はアメリカ人労働組合と同じ原則のために働いていると主張し、アメリカ労働者と提携することを望んでいる。ササキは大量の日本人労働者の輸入はアメリカ人組合員同様に日本人組合員を傷つけると主張している。昨年2月にシアトルで日本人組合が結成されて以来、日本人鉄道労働者の賃金は1日1ドル50セントに上がり、そして組合は現在、日本人従業員が6ヵ月間働くまでは1日10セントを差し引くという請負人の慣習と闘っている。ササキは日本人とアメリカ人労働者の間に格差があることを認めたが、しかし彼は、日本人の賃金のスケールをアメリカ人に今よりもっと近づけたいと望んでいると語っている。

ササキ氏は、組織の急速な成長に対する最大の障害は低賃金労働を確保できなくなるであろうことを知っている請負人たちの強い反対であると述べた。現在のところ組合員数は約700人であるが、しかし彼等は今後急速に拡

大することを期待している。当市には200人ほどの日本人がおり彼等の大半は加入の意志を示している。

ササキ氏は、その目的はより高い基準に組合員を教育すること、彼等の労働に対してより多くを確保すること、白人労働者との間により友好的な関係を創り出すこと、そして求められた時には白人労働者を支持し、提携することであると断言した⁽⁸⁾。

諸般の事情に鑑みて、K. ササキとは佐々木勝成に相違ない。

こうして「日本人労働組合」は活動を開始した。しかしながら組合員数600人（阿部）、あるいは約700人（佐々木）と称することができるような状態がいつまで続いたかは、実のところ疑問である。

少なくとも機関紙『同胞』の発行は長続きしなかった。そしてこれは高橋や山岡の圧迫のためばかりではなかった。長期にわたってシアトルを代表する邦字紙であった『大北日報』の主筆竹内幸次郎は、『米国西北部日本移民史』第12篇「移民地の新聞雑誌」第5章「邦字雑誌の変遷」の中で『同胞』について次のように述べている。

佐々木勝成の主宰せる労働組合の機関紙で、太田虹村が主に執筆していた。僅か34号で廃刊したのは金が続かなかつたからである⁽⁹⁾。

実は竹内自身も『大北日報』発刊直前の一時期に『同胞』に執筆していたようである。伊藤一男『続・北米百年桜』中の大塚漁夫の回顧に次のような文章がある。

私の滞米中、大不景気がきた。一九〇九年（明治四十二年）タフト大統領就任当時である。私の「天声」も片山風雲（景雄、岡山県）と武田硯湾の「アメリカ」、初鹿野屈夔（詮次郎）の「やまと」、阿部照洋（豊治）、竹内青巒、佐々木勝成の日本人労働組合機関誌『同胞』、植原悦二郎、松見大八の「シアトル商業」など諸月刊雑誌は、半死半生。危うくおダブツになろうとした⁽¹⁰⁾。

結局のところ、カール・ヨネダが述べているように、この組合は発展できなかったのである。1910年から14年にかけての「日本人労働組合」の動向に関する記述を私は発見することができなかった。

次に佐々木勝成と「日本人労働組合」の名前が出てくるのは1915年の『大北日報』記事、およびそれに基づいた、しかしかなり簡略化された竹内幸次郎の『米国西北部日本移民史』における記述である。

『米国西北部日本移民史』の記述は「高橋徹夫氏を會頭に、菊竹経義氏を副會頭に、佐々木勝成氏を常任幹事として、新に同胞間に設立された労働組合は大正四年九月一日、各新聞社員を招いて其趣旨と抱負とを披瀝した」という文章ではじまっている。「新に設立された」という言葉に鑑みてこの組合は、たとえ佐々木勝成が常任幹事を務めて実質的な責任者であったとしても、1906年創立の「日本人労働組合」そのものとは思われない。旧組合は結局のところ基盤を失って崩壊し、佐々木がシアトル日本人社会の有力者をいわばスポンサーとして新組合を再建したと理解してはば間違いのないところと思われる。結果が、かつては糾弾される対象であった高橋徹夫の會頭、そして高橋同様に請負

人として資産を蓄えシアトル正金銀行を設立した菊竹経義の副會頭への就任であった。

『大北日報』の記述によるとこの会合では、高橋が會頭として労働者の団結を通じて日本人と白人の親善を深めることの重要性を説いたのに対して、記者側を代表して竹内青巒（幸次郎）が、「労働組合設立の如きは天下の大勢で一人として否定する者はない只だ願はくは役員諸君が指導宜しきを得て所謂モツブに終らざらん事を希望する」と述べたという。竹内が一時的とはいえ旧組合の機関紙『同胞』の執筆者であったことを思えば皮肉な事態である。

したがって、たとえ高橋がその挨拶において「同胞労働者を糾合し白人労働者と提携して」と述べたとしても、そして佐々木勝成にそのような意図が実際にあったとしても、この新組合を真正の労働者団体と考えることは困難である。すなわち、600名の鉄道労働者を擁して山岡や高橋と対決したという旧組合とは性格が異なっている。佐々木が1907年にバーリングハムで白人労働組合の幹部を前に旧組合の課題と語ったところの、鉄道請負会社による1日10セントの天引きという労働者にとって不利な慣習を廃止させるために、この新組合が努力したとは思えない。この課題を実現したのは、序文で述べたように山根良章らが1919年に設立した、保線工友愛会の日本人支部であった⁽¹¹⁾。

しかしながら、だからといってこの新組合の結成を茶番劇と片づけることは適切ではない。なぜなら、その後この新組合はシアトル近辺において重要な事件が発生した際にはいつも、「Japanese Labor Association」の名でもってアメリカ人労働運動に働きかけ、彼らの排日運動をなだめようという努力をつづけたのである。最初に引用したヨネダの文章には1915年の炭鉱爆発の際に高橋が義捐金を送付したという事実が述べられている。その翌年の港湾労働者のストライキの時には、佐々木がシアトル中央労働評議会に対して、「日本人労働組合」の組合員は経営者側から「非常に魅力的な条件を提供されているけれどもスト破りにはならない」という書簡を送った。中央労働評議会はこの事実をその機関紙ユニオン・レコードに掲載してこれに感謝している⁽¹²⁾。また1919年のシアトル・ゼネラル・ストライキの時には、当時中央評議会の書記であったジェームズ・ダンカン宛に次のような書簡が送られている。

目下の危機に関連して、我々日本人労働組合はあなた方と歩調を合わせてゼネラル・ストライキに参加することをここに宣言します。我々は、アメリカ労働総同盟が未だに我々を差別しその組織の一員となることを拒んでいるのに、ここシアトルのローカルユニオンが我々に対して親愛の態度を示していることに感謝しています。職種や国籍に関わりなく、全世界の労働者は同じ様に資本家と対立しており、労働者はますます困難な状況におかれており、我々はこの戦いが勝利に終わるようあらゆる手をつくして義務を果たします。同封した50ドルはこの事務所のメンバーから集めたものです。我々が心から共感しているこのゼネラル・ストライキを支援させてください⁽¹³⁾。

実際には、このストライキに参加した日本人の多くは、理髪師、ダイウォーク、洋食店など個々の業種別同業団体の組合員であったように思われる。しかしながら、佐々木の「日本人労働組合」も、そのメンバーに対して「ゼネラル・ストライキ中当組合員は労働を休止せられたし」という広告を邦字新聞に掲載してストライキへの参加を呼びかけているから、その協力の姿勢に偽りはなかったので

ある⁽¹⁴⁾。なお理髪師組合の伊東忠三郎は新組合創立時の幹部の1人であるから、1919年まで組合にとどまっていたとすれば、彼は理髪師組合の一員としてと同時に「日本人労働組合」の一員としてもストライキに参加したことになろう。

そしてその後も様々な機会に、「日本人労働組合」を代表して佐々木がシアトル労働運動と接触を試みていたという事実を、我々は労働運動側の書類によって窺うことができる。シアトル労働運動が、サンフランシスコをはじめとする他の地域の労働運動とは異なって、かなり初期の段階で日本人排斥運動を中止するに至ったについては多くの理由を挙げる事が可能であるが、佐々木と「日本人労働組合」の努力もたしかにその一つだったのである。

第2部

1900年から1910年までのシアトル・タイムズの日本人関連記事の大半は、白人労働団体を中心とする日本人排斥運動に関わるものである。労働団体は日本人の雇い入れに抗議し、集会を開き、反対を決議し、時には暴力に訴えた。日本人の流入に対抗するために新に組合が組織されることすらあった。しかしながら、これらの排斥事件についてはタイムズの記事を吟味する必要はない。同時期に発行されていたシアトル中央労働評議会の機関紙、ユニオン・レコード紙の方がはるかに多くの、ただし客観的とはとうてい言えない視点からの記事を提供している。また日本人側の資料も豊富である。ここでは、北西部における日本人労働運動の起点を探るという目的にしたがって、日本人自身が積極的に労働運動にかかわった事例を中心に紹介したい。序文で述べたようにそのような例は残念ながら僅かであるが。

最初に紹介したいのは、1903年3月の記事である。この記事は第1部で吟味した「日本人労働組合」結成の経緯との関連で興味深い。

グレイト・ノーザン鉄道に雇われている日本人労働者たちは会社に対して1日10セントの賃上げを要求しており、彼らが本気であるということを示すために、インターベイ、バラードおよびエヴェレットで雇われている約35名が、今朝就労を拒否した。太平洋沿岸部では200人から300人の日本人が同鉄道によって雇われており、彼らに対して冬季には1日1ドル20セントを支払い、夏期にはこれを1ドル30セントに引き上げるのが慣習であった。目下の賃金は1ドル20セントであり、現在の基準賃金を1ドル30セントとしてその後これを1ドル50セントに引き上げるといった要求の結果として、ストライキが起りそうになっている

同鉄道が雇っている労働者の大多数は当市の東洋貿易会社を通じて供給されている。本日午後、彼の同胞の目下の窮状について意見を求められた同社のマネージャー、C. T. 高橋は以下のように語った。

「雇われている日本人の賃金を夏期には引き上げて冬の数ヶ月には引き下げるのが同鉄道の慣習であった。今年までは、彼らは夏期には平均1ドル35セントを支払われていた。もっとも、一部の労働者は1ドル50セントを支払われていた。この夏の労働に対する需要は大きく、同鉄道が支払うよりも良い賃金を缶詰工場や農場経営者から受け取ることができる。労働者たちは今年少なくとも1日1ドル50セントを受け取ることが出来ないかぎ

り同鉄道では働かないと言っている。目下の要求は10セントの引き上げであり、これは春期の賃金が1ドル30セントになることを意味している。

「200人から300人の労働者のうちで、インターベイ、バラードおよびエヴェレットの約35名だけが今朝就労を拒否した。もしも会社が要求を考慮することを拒否するならば、疑いもなく全員が仕事をストップするであろう。しかしながら、要求は正当なものであるように思われ、これ以上こじれることなく万事解決されるであろうと私は確信している。」(Seattle Times, March 10, 1903)

次の記事も鉄道保線工のストライキに関するものである。

ノーザン・パシフィックのワシントンおよびオレゴン部の日本人保線工は本日賃上げを要求してストライキを行った。約2ヶ月前に同鉄道は保線工の賃金を1日2ドルから1ドル50セントに引き下げた。労働者はその切り下げを拒否し多数のギリシア人が罷業者の代わりに導入された。

その後ギリシア人の代わりにジャップが1日1ドルで仕事についた。ジャップは彼らの賃金に不満を抱くようになり、その他の不満をも主張して今朝ストライキに入った。

会社の幹部は以前の従業員の一部と接触して彼らに旧賃金の2ドルを申し出た。

労働者達は以前受けた処遇に非常に怒っており、どんな賃金でも同社のために働くことを拒否した。

会社は労働者を非常に必要としている。鉄道の状況は悪くコンスタントなケアが必要である。ジャップは全員彼らが働いていた場所を去った。(Seattle Times, December 29, 1903)

この事件では、直接スト破りとして導入されたのはギリシア人で、日本人の就労の時点では大きな抵抗は起きなかったように思われる。しかしより直接的にスト破りとして日本人が就労した場合にはしばしば暴力沙汰に発展した。

ストライキ中のイタリア人と日本人が明朝オーバーンで衝突すると予想されており、ルー・C. スミス保安官はノーザン・パシフィック鉄道によって衝突が起こりそうな場所に10人の助手を派遣するよう要請されている。保安官は今朝、ノーザン・パシフィックの地区監督 W・G・アルビーが署名したタコマからの書簡を受け取ったが、それは日本人の保護を求めている。

アルビーは会社はイタリア人の代わりに日本人を雇うつもりだが、イタリア人は彼らの宿所からの立ち退きを拒否しており彼らを追放しようとする者は誰でも撃つと脅していると電報で知らせてきた。

職場放棄

30人が困難な状況に追い込まれていると言われている。全員が保線工で、イタリア人たちは数日前賃上げの要求がはっきりと拒否されるとストライキを決定した。彼らは昨日職場を放棄した。彼らは小屋から出て行くよう命じられたが拒否した。

日本人が雇われ、そして昨夜彼らのうち50人がイタリア人の家のそばの土地で寝た。今朝イタリア人に対して宿舎を退去するよう要求がなされたが、彼らは再び立ち退きを拒否し、鉄道会社の幹部に彼らを追放しようとする者は誰でも、そして仕事を奪おうとする日本人は誰でも撃つと通告した。

25セントの賃上げを要求

工事監督は時間を無駄にすることなしに欠員を埋めることが出来ると信じている。イタリア人は1日25セントの賃上げを要求している。彼らはラインの沿線のオーバーン、レスター、カンサケット、サウスタコマ、セントラリア、シェバリス、ミーカー、ケント、コヴィングトンその他で仕事を放棄した。

アルビー監督はスミス保安官に、明日は日本人の労働で保線工事を再開できるであろう、また自分はキング郡の保護を期待していると語った。

今日午後10人が保安官によって助手に任命され今夜オーバーンに向かうだろう。(Seattle Times, August 21, 1908)

この事件は、佐々木がバーリングハムで白人労働組合員を前に「組合員数は約700人」と語ってからほぼ1年後に発生している。しかしながら、この事件の解決に「日本人労働組合」が一定の役割を果たしたという形跡はない。なお、その後のいくつかの記事から推察するに、助手の護衛が有効に機能したためかこの事件で現実には日本人保線工が暴行されることはなかったようである。

鉄道以外の業種における日本人と労働運動との関わりについて言及している記事を2つ、最後に紹介しておく。なお、レストラン経営者に関する記事はエヴェレット発である。

M. サトウという講和使節ではない日本人でレストラン経営者が、その従業員のコック・ウエーター組合への加入を申し込んだが、労働評議会はそれをどうするか決めかねている。サトウは、自分は現在組合基準の賃金を支払っており、今後も支払う予定であると語り、彼の事業所のためにユニオン・カードを取得したいと考えている。労働関係者はこれを日本人の組織化を開始する好機であると考えているが、彼らを通常の組合に迎え入れるか、提案されたように別個の組合を形成すべきか今のところ決定していない。(Seattle Times, August 24, 1905)

海峽地区の蒸気船の日本人コックが組合を結成し、船主がコックを雇いたい時には調印前に組合のエージェントと交渉しなければならなくなった。

ほとんどの船の日本人コックは月に75ドルを受け取っている。白人コックは85ドルを受け取っている。(Seattle Times, April 4, 1907)

注

1. Yuji Ichioka, *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*, New York: The Free Press, 1988, pp. 91-113 (富田虎男, 糸井輝子, 篠田左多江訳『一世——黎明期アメリカ移民の物語』刀水書房, 1992年, 101-125頁)。
2. 拙著『アメリカ労働運動と日本人移民——シアトルにおける排斥と連帯』(大学教育出版, 1998年) 参照。
3. カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』, 新日本出版社, 1967年, 44-45頁, 伊藤一男『北米百年桜(一)』, PMC出版, 1984年(初版, 北米百年桜実行委員会, 1969年) 388-389頁。
4. 膨大な無関係の記事の中から主題に関係のある少数の記事を見つける作業は時間と神経を使う作業であるが、この時期のシアトル・タイムズ紙については John R. Litz 氏によって *The Japanese in the Seattle times: January 1, 1900 to December 31, 1909*, Seattle, c1995 という目録が作成されており、そうでない場合と比較して作業ははるかに容易であ

- た。Litz 氏に感謝したい。
5. ヨネダ, 前掲書, 43-44頁。
 6. 『新聞従業員組合時報』1931年10月10日号 (Karl Yoneda Papers, UCLA, Box 5 and Japanese American Research Project, UCLA, Box 351) および『新世界朝日』1935年7月30日 (Karl Yoneda Papers, Box 2)。なお、「日本人労働組合」の設立はこの記事では1907年頃となっているが, ヨネダが引用している『新世界』紙の阿部自身の回想によれば1906年である。ヨネダ, 前掲書, 44頁, 『新世界』1935年7月30日 (Karl Yoneda Papers, Box 2)。もともと, 山岡音高を単なる「鉄道請負ボス」と見なすのは問題がある。この時点で「日本人労働組合」と正面から対立したのは事実であろうが, 彼はもともと過激な活動の結果として10年間を明治の北海道の獄で過ごした自由民権運動の闘士であり, 労働運動にも強い関心を抱いていた。
 7. 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』, 雄松堂, 1994年(初版, 大北日報社, 1929年)157-158頁。
 8. この記事は *Seattle Union Record*, September 28, 1907 に転載された。私が見たのはこの転載された記事である。
 9. 竹内, 前掲書, 574頁。
 10. 伊藤一男『続・日本百年桜(四)』, PMC 出版, 1984年(初版, 日貿出版社, 1973年), 70頁。なお, 竹内自身もそのことを自著の中で記している。竹内, 前掲書, 564頁。
 11. 以上, 同上書, 385-386頁, 『大北日報』1915年9月2日, ヨネダ, 前掲書, 44-45頁, 及び伊藤『北米百年桜』, 388-389頁。なお, 伊東『北米百年桜』の該当箇所には山根の運動の支援者の1人として阿部豊治の名前も挙げられている。
 12. *Seattle Union Record*, July 22, 1916.
 13. Letter from Art Shields to Karl Yoneda, February 2, 1974 (Karl Yoneda Papers, Box 14). この文書は, ゼネラル・ストライキ参加者の1人である Joseph Pass によって the Sunday Workers of New York, Feb. 8, 1936 に掲載されたものであり, ヨネダの依頼によって, 彼の友人であるとともに Pass の友人であった Art Shields が発見した。彼がヨネダに送った手紙の中にタイプされている。
 14. 『大北日報』1919年2月5日。

本稿は平成14年度科学研究費補助金基盤研究C(一般)課題番号13639000による研究の一部である。